

巻頭言「大きく生まれ変わります ～小教研～」 教育研究所連絡協議会 西村 彰博 委員長

小田原市小学校教育研究会は、昭和 50 年にスタートし、今年度で 45 年目になります。学習指導要領の改訂に伴って研究部を増やすなど、幾多の変遷を重ねながら今日まで研究・運営されてきました。令和 3 年度からは足柄下郡教育会と統合し、新たに「小田原・足柄下地区小学校教育研究会」として 17 研究部、700 名を超える組織として生まれ変わります。教育研究会は、子どもの健やかな成長を願って立ち上げられた自主研究組織です。平成 24 年度に統合した中教研や市幼研も同様です。統合により会員数が増えれば意見のぶつかり合いや互いの指摘など、より広い、より深い、よりの確で柔軟性のある教育のあり方を見いだすことができます。これからも人との関わりをとおして研究を深め、子どもたちの学習や生活、様々な教育活動に生かしながら、健やかな子どもたちの成長につなげていきたいと思えます。そのためにも、一人ひとりの教職員が地道に研究を重ね、一步一步着実に前に進んでいきたいものです。さて、新型コロナウイルスの蔓延により、各園、各小中学校にもその影響が大きく現れ、大変な時代を乗り越えていこうとしています。この「大変」という言葉を「大きく変わる」と解釈することによって、これまで当たり前だった教育活動をどう変化させながら進めていくかということが大切になってきます。すべての教職員が知恵を出し合い、努力し、共に力を合わせて様々な難局を乗り越え、子どもたちのために力を尽くしていきましょう。

研究所便り① 今年度の研究所の事業

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、教育研究所の多くの事業がスタイルを変えての実施や、やむなく中止とせざるを得ませんでした。学校や教職員の皆様にもご理解とご協力をいただき深く感謝申し上げます。学校再開後には、共同研究やパワーアップ研修は再開したものの、紙上開催での実施もありました。しかし「プロジェクト研究」「共同研究の一部」「教育講演会」「おだわらっ子ドリムシアター」「自然観察会」「未来学舎の一部」は残念ながら実施することができませんでした。また新たに GIGA スクール構想の準備に伴う、インターネット通信機器の配付や研修会などが加わり、学校や教職員の皆様に新たな負担をおかけすることになりました。

こうしたコロナ禍の中、教育研究所も事業の開催方法や内容について検討し、今後は新しいスタイルを積極的に取り入れ推進していくこととなります。具体的には、オンラインでの研修や GIGA スクール構想の推進に係る「学習ネットワーク活用研修」の複数回開催、共同研究においても本年度実施してきた「特別活動に関する研究」に加え、ICT の活用を図る内容に重点を置き取り組んでいきます。また、引き続き実施する内容では夏季休業中に開催している教育講演会は、令和 3 年度は 9 月にオープンする「三の丸ホール」を会場に 12 月開催とし、勤務時間後にも関わらず多くの先生方に参加していただいている「未来学舎」は、昨今のニーズに合わせた講師を選定し開催します。パワーアップ研修や副読本の刊行なども例年通り行います。コロナの流行が収まるのを願うばかりですが、これからも教職員の皆様の期待に応えられるよう、教育の調査・研究と内容改善、教職員の資質向上のための研修に力を注ぎます。どうぞ一層のご協力をお願いいたします。

研究所便り② パワーアップ研修

パワーアップ研修は、経験年数3～10年程度を経過した教職員を対象に、一層の指導力や教職に対する情熱を高めることを目的とした、学校訪問による個別的な研修です。研修者は自らが立てたテーマに基づく授業づくりとその実践をする中で、研修者一人ひとりが成果と課題を見出し、それらを学びとして、日々の教育実践に生かしていくことを積み重ねています。研修者との関わり合いの中から強く感じたことを紹介します。それは、「**自分の良さを生かした学級経営をしよう**」ということです。何年か経験すると様々なことがわかったり見えてきたりします。うまくいかないと不安になり全てを自分の責任ではないかと心配し悩みがちになります。そのようなときは「6年間（3年間）を通してみんなで育てていくという考え」をしてみましょう。自分のたりないところは他の先生が補ってくれると考えましょう。どの先生も素晴らしい良さをもっています。優しさであったり、厳しさであったり、温かさであったり、清潔さであったり、正確さであったり等、様々です。様々であるからこそ、子どもは入学してから卒業までの6年間（3年間）で色々な経験ができるのです。その中でそれぞれの先生の良さを体得して成長をしていくものです。ぜひ、担任をした1年間は先生方自身の良さを十分発揮して子どもを成長させてほしいです。

研究所便り③ 過去の研究の紹介

特別活動に関係する過去の共同研究には「H19 学級経営に関する研究（中学校）」や「H22 小学校学級経営に関する研究」があります。本年度スタートした「児童生徒が主体的に取り組む特別活動に関する研究」は、学級集団づくりに焦点を当て研究を進めています。紙上開催でスタートし、9月からは研究員全員が集まり取り組んでいます。11月には國學院大学教授の杉田洋先生を講師にお招きし、ご指導をいただきました。杉田先生からは特別活動における「話し合い活動」の重要性が繰り返しお話しされました。また、研究員はテーマを意識した授業実践を行い、児童生徒が主体的に参加できる特別活動の研究を深めています。

ある教室から 人と人との関わり

教育指導課 指導主事 園山 隆志

ある小学校の外国語の授業を参観しました。「Turn right.」「Turn left.」「Go straight.」と教師の発声が続いてジェスチャーを加えながらリピートする子どもたち。子どもたちの笑顔と元気な声から外国語の授業が始まりました。

本時は本単元で学習したことを生かした宝さがしゲームでした。グループの代表者が宝に向かって移動できるように、相手に伝わる声量で発声する児童とその周りで困っている友達を励まし、教え合う子どもたち。友達の指示を聞き取って宝まで辿り着くことができた喜び、自分の発音で友達を宝まで導くことができた達成感を得ることができるとても有意義な活動でした。また、本時はこれで終わりではありません。集めた宝を並び替えると、既習の英文ができあがり、クイズになっているという授業者のアイデア溢れるおもしろい展開が待っていました。これまでの児童の学習状況をよく把握した学習活動の工夫には大変驚きました。

小学校学習指導要領の外国語科の目標には、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが明記されています。コミュニケーションを図る手段はさまざまありますが、人と人が直接関わることによって得られるものは、オンラインでは難しいものも多くあると感じます。学校でしかできない学びの重要性を改めて感じた授業でした。

